

多少讀みにくゝあり、總じて、第1版に比べると、何となく書物のドツシリした重みがなくなつたやうに感じる。—— こんな事は枝葉の問題であるが、

(第197頁の下部から第3行目にFall sein wird, so さいふ4語が落ちてゐる)。誤植は殆んど無い。

こんな書物が日本語にも愼しい。

此の書物と共に使用されるかの Tafeln zur theoretischen Astronomie (同著者の)も目下第2版製作中であるさいふ。(山本)

アイヌの暦

アイヌには暦がないさうだ自分の年や生年月日なごも勿論覚えてゐないさいふ。ところがシコタン島のアイヌは、板の表に穴をあけて毎朝それに一本の小木片を立てゝ日を數へるさうである。多分日本の暦を眞似たものであらう。

或るアイヌは一年を十二ヶ月に分て陰暦の正月を『ト・イ・タンネ』(長い日さいふ)二月を『ハブラブ・チュブ』(鳥の啼く月をいふ)三月を『モ・キウタ・チュブ』(草根を掘り始める月さいふ)五月を『モ・マウ・タ・チュブ』(玫瑰を探り始める月さいふ)六月を『シ・マウ・タ・チュブ』(玫瑰を多く採る月さいふ)七月を『モ・ニヨラブ・チュブ』(葉の落ち始める月)八月を『シ・ニヨラブ・チュブ』(葉の落ちる月)九月を『ウンボウ・チュブ』(蹠の冷たい月)十月を『シュナン・チュブ』(火で鮭を漁る月)十一月を『イ・ニ・カイ』(弓折れ月)十二月を『チウ・ハブ・チュブ』(潮が速い月)と別れてゐる。

吾々日本人の祖先もやはり昔はこんな名詞を用ひて十二ヶ月をいひ現してゐたもので、例へば三月の彌生は草木の發生を意味し四月の卯の花月は即ち卯の花の咲く月であり又五月の皐月はサナヘ月の略であつた。殊に八月の葉月さいふのは、アイヌ人と變りはない。また十一月の霜月も説明するまでもない。

又アイヌは鮭漁を以て年の區切りとなしてゐる。三年経つたことを『鮭を取つて、鯨を取つて又鮭を取つて』さいふさうであるこの表現法は日本の古代にもあつたこの事である。